

まちづくりに資する共有知としての まちの記憶とその共有のあり方 —「池上まちよみプロジェクト」を例に—

佐瀬 優子

正会員 法政大学教育技術嘱託 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1, E-mail:yuko.sase.45@adm.hosei.ac.jp)

近年、まちづくりや地域課題の解決に向けて行政と住民との協働が求められる中、住民の積極的かつ幅広い参加を下支えするものとして、まちへの理解や愛着を育むことの重要性が高まっている。地域史学習やまちづくりワークショップなど、理解や愛着につながる活動は全国各地で無数に行われているが、まちづくりに資するような共有知を実現するためには、活動間の連携の強化や、俯瞰的な視座に基づく活動運営が欠かせない。本稿では、東京都大田区池上においてまちの記憶の共有と継承を目指す市民活動「池上まちよみプロジェクト」を対象に、これまでの活動内容と課題を整理した上で、より効果的に活動を継続していくために必要な判断枠組を設定し、今後の方向性について考察した。

キーワード: まちの記憶, 地域史, 市民活動, まちづくり, 池上まちよみプロジェクト

1 はじめに

(1) 背景

1970年代以降の都市化の進展を背景に、わが国においても交通・公害・防災といった都市問題への対応を目的とする市民活動が活発に行なわれるようになった。1990年代には、地方分権や住民自治の機運が高まる一方で、人々の価値観の多様化が加速した。そのような中で、市民による地域活動は、その手法や法制度の整備を含めて、充実の一途を辿ってきている。とりわけ、まちづくりに関連する分野においては、1992年の都市計画法改正に伴い、地区計画において市民参加が重要視されるようになったことを契機として、その動きが一段と活発化した¹⁾。

このような流れの中で、近年は、まちづくりや地域課題の解決における担い手の育成が各地で課題となっている。少子高齢化や都市への人口集中、地方における過疎化の進行など、地域によって抱える問題は様々であるが、そのいずれにおいても、行政に頼らない自律的なまちづくり活動、ひいてはそのような活動を推進するプレーヤーの必要性が高まっている。この課題に対しては、すでに盛んに行なわれているリーダー育成やコーディネーター養成などの即

効性のある人材の発掘と育成の取り組みだけではなく、まちに興味や関心、問題意識をもつ市民の裾野を広げることや、市民のまちづくりへの参加のハードルを下げることなどの、地道な取り組みが求められる²⁾。

さらに、すでにある個々の活動の効果を高めていくことも有効な対応策となる。特に、情報の網羅性や活動の持続性など、市民活動が直面しやすい共通の課題を解決することが必要で、これについては、活動間の連携やプラットフォーム構築、より俯瞰的な視座に立った活動運営など、考えられる対応策を講じていくことが重要である³⁾。

以上のような背景を踏まえ、本稿では、まちづくりに関する地域活動のうち、特に、地域史やまちの記憶の共有を目指す活動を対象として、それらの活動を「まちづくりに資する共有知」の実現へとつなげていくには何が必要か、求められる活動のあり方を模索していく。

(2) 「まちの記憶の共有」と教育、まちづくり

地域史やまちの記憶を共有する場として、わが国においてもっとも多くの人々が触れるのは、学校教育に

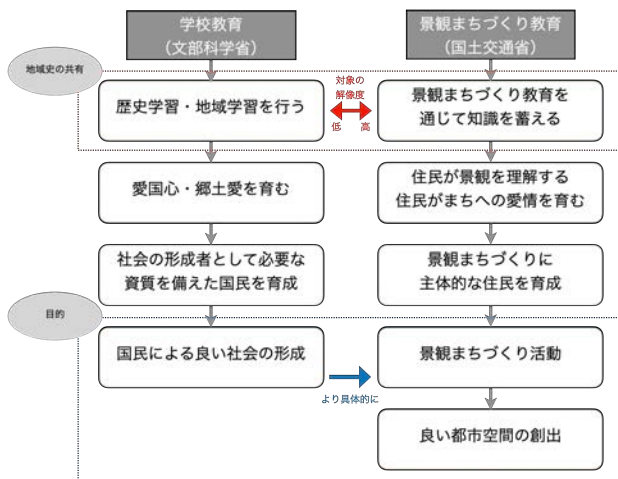


図-1 歴史教育と景観まちづくり教育の関係 (筆者作成)

における歴史教育であろう。教育基本法⁴⁾第一章「教育の目的及び理念」には、教育の目的を達成するために掲げられた5つの目標の1つとして「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国の郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と記されている。この目標の達成を担う社会科の学習指導要領⁵⁾においても同様に、地域や国の歴史を理解することが、地域社会に対する誇りと愛情、国土と歴史に対する愛情を涵養する、とされている。

一方で、国土交通省が掲げる「景観まちづくり教育」においては、「それぞれの地域ごとの歴史、地勢や生態系などの風土、文化や伝統」が景観を構成する主要な要素であるということ、そして景観に対する関心喚起がよりよいまちづくりにつながるといったことが謳われている⁶⁾。

このように、学校教育における社会科の歴史学習と景観まちづくり教育では、地域の歴史を学ぶ目的や扱う領域の広さや「解像度」などに違いがある(図-1)。同様に、地域史を共有しようとする地域活動にもそれぞれに目的があり、教育基本法に掲げられるような地域愛着や郷土愛の啓蒙を目指す活動もあれば、まちづくりへの参加を見据えた対象領域における情報収集活動もあり、また、純粋な探究心に基づく趣味の活動など、さまざまな動機がありうる。しかし、同じまちの歴史を取り扱う以上、それらの活動には重なり合う部分が多くあり、その重なりを余さずに捉えることが、「まちづくりに資する共有知」の実現に向けた大きな一歩になると考える。

(3) 本稿の目的

本稿の目的は二つある。一つは、筆者自身が「まちの記憶の共有と継承」を目指して2022年4月に立ち上げ、地域の仲間とともに運営している「池上ま

ちよみプロジェクト」について、その活動内容と課題を整理して提示することである。現在進行中の活動の具体的実態を論理立てて示すことにより、同種の活動に取り組んでいる、あるいはこれから立ち上げようと考えている(まだ見ぬ)同志の方々との建設的な議論の端緒としたい。

もう一つは、この活動を今後より効果的に継続していくために必要だと思われる、活動の「現在地」を確認するためのフレームワーク(判断枠組)を示すことである。この「現在地」には二つの意味があり、一つ目は、活動によって将来到達したい目標に対して現在何がどこまで達成できているのかということ、二つ目は、周辺の活動との関係性の中で自身の活動はどのような位置付けになるのかということである。

2 概念整理

「池上まちよみプロジェクト」において頻出する、基本的な概念の整理を行う。

(1) 「まち」

池上まちよみプロジェクトでは、対象地である東京都大田区の池上界隈のことを「まち」と表している。「まち」のひらがな表記については、さまざまな見解が存在するが⁷⁾、本プロジェクトにおいては、あえてその範囲や意味を限定しないように「まち」という表現を用いている。

「池上」という地名は、この地域を支配していた豪族である池上氏の名前が由来であるとされており、明治時代には「池上村」、大正末期には「池上町」の名前に引き継がれているが、このときの「池上町」は、現在の「池上(一丁目~八丁目)」よりも広範囲にわたっている⁸⁾。一方で、現在は、大田区の池上特別出張所の所管区域(池上、中央、南馬込)のことを「池上」と捉える向きもある。

以上の経緯を踏まえた上で、池上まちよみプロジェクトは、対象とする「まち」の定義をそのいずれにも固定せず、当面は、「まち」が意味する範囲のゆれ自体も「まちの記憶」の一部として捉えていく。

(2) 「地域史」と「まちの記憶」

ブリタニカ国際大百科事典の解説によれば、「地域史」という言葉は1960年代以降に盛んに使われるようになったもので、それ以前から使われていた「地方史」に比べて、風俗・社会、言葉、経済活動などを含めた「地域社会の生活史」という意味合いが強いとされている⁹⁾。池上まちよみプロジェクトは、まさにこのような観点から、まちの歴史を知り次世代へと語り継ぐことを目指している。

一方で、まちの人々の個人的な体験や、おぼろげな記憶にまでアプローチするには、「地域史」という言葉よりも情緒的で柔らかい表現が相応しく、実際の活動の現場においては「まちの記憶」という表現を多用している。

しかし同時に、その柔軟なアプローチを確実に遂行するためには、「まちの記憶」が何を指すのか、特に、どの時代のどのような（まちの何に関連する）記憶を対象としているのかという点を、プロジェクトのある段階で明確にすることも必要である。現在、池上まちよみプロジェクトでは、これまでに入手できた史料や「記憶」を踏まえ、当面の目標として、①関東大震災前後、②第二次世界大戦後、③1980年代の3つの時代における「まちなみの記憶」の収集に特に力を入れようと考えている。

3 池上まちよみプロジェクト

池上まちよみプロジェクトの概要と 2022 年度の活動内容を整理する。

(1) 対象地の概況

本プロジェクトの対象地である東京都大田区の池上界限は、日蓮宗の大本山である池上本門寺の門前町として栄え、現在に至るまで寺町の風情の残るまちである。大田区の中心部に位置し、池上特別出張所管内における世帯数は 24,427 世帯、人口は 45,227 人（令和 4 年 12 月現在）となっている。大田区都市計画マスタープランにおいて、池上地区は地域のまちづくり拠点、水と緑の拠点、歴史・文化の拠点に位置付けられており、大森や蒲田に次ぐ、区内の重要拠点となっている。

(2) プロジェクトの概要

本プロジェクトは「池上の今と昔を読み解き、語り継ぐプロジェクト、まちをめぐる「対話」の「場」をつくり育てる試み」というキャッチフレーズで 2022 年 4 月に筆者が立ち上げた市民活動の一つである。活動にあたっては、まず地域史料の収集に力を入れ、加えて初年度は、それらを題材とした、まちの人々との対話（コミュニケーション）と、そのための場づくりに重きを置いた。

また 2022 年度は、日立東大ラボによるスマートシティの実装に関する研究プロジェクトの対象事例にも取り上げられ、地域史料を生かした、オンライン・オフラインのハイブリッド型ワークショップや、オンラインプラットフォームの設計と活用など、活動の一部をその委託業務として遂行した。

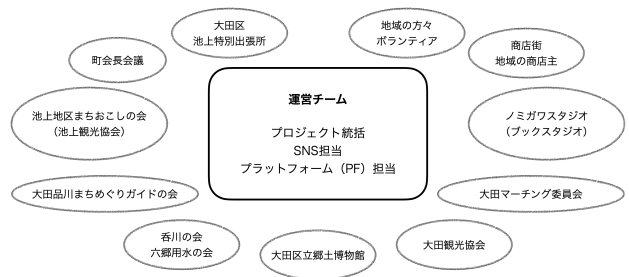


図-2 池上まちよみプロジェクトの運営体制 (2022 年度)

a) 立ち上げの動機と運営メンバー

本プロジェクトは、筆者が発起人となり、筆者を含むメンバー3名で運営を担う形でスタートした。筆者自身は、地元をよく知り、一市民として地元のまちづくりに貢献したいという思いで、このプロジェクトの立ち上げに至った。3名の運営メンバーには明確な役割分担があり、プロジェクト統括、SNS担当、プラットフォーム担当に分かれている。

また、活動運営については最小限の人数で担っているが、具体的な活動においては、積極的に、まちの既存の組織や団体やボランティアなどの協力を仰ぐ形をとっている（図-2）。

b) 具体的な活動内容 (2022 年度)

「まちの記憶」を集める活動としては、まず、古写真と古地図の収集からスタートし、それらをデータ化する作業を行なった。その際、データ化する作業をバックヤードで済ませるのではなく、その作業プロセスそのものを、まちの人々の世代間対話を促す好機の一つと捉え、「対話の場」として演出することを試みた（図-3）。

また、まちの中心部に位置するシェア型本屋の棚をレンタルし、収集した史料の保管・展示の場所として活用することとして、ここに、情報発信・交流拠点としての機能を持たせるようにした。月1回程度、この場所で史料展示を中心とするイベントを開催し、各回 10 名～30 名程度の来場者との交流をはかった（図-4）。

交流のための場づくりは、実空間と仮想空間の双方で試行錯誤を重ね、その両者を行き来してもらう工夫をした。具体的には、既存の3種類のSNSをそれぞれの特性を踏まえて使い分け、日頃から積極的な発信を行った。X (旧 Twitter) においては、フォロワーとの双方向のやりとりを強く意識し、ハッシュタグを活用したオンライン・ワークショップの設計と運営を行なっている。結果として、X (旧 Twitter) のフォロワー数は活動開始から1年あまりで1,000名超にまで伸びた。



図-3 「写真パネルをスキャンする会」(2022年5月12日開催)の様子



図-4 シェア型本屋を情報発信・交流拠点として活用



図-5 古民家カフェを借りて開催した4日間のまちよみ展

また、SNSとは別に、オンライン上にプラットフォーム¹⁰⁾を構築し、じっくりと議論を重ねることや、その議論の経緯をアーカイブすること、情報をマップに紐づけることなど、SNSでは実現しにくい機能を持たせることとした。ここでも古写真のオンラインマップへの登録作業をあえてイベント化し、古写真の提供者とマップに関心を持つ人との世代間対話の場を創出することを試みた。

9月には、初年度のハイライトとして、それまでに

収集した史料の展示を中心とする4日間のイベント「まちよみ展」を開催した(図-5)。地域内の古民家カフェの一角(レンタルスペース)を借り、地域情報誌に関するトークイベントや、池上本門寺ツアーなどの企画と組み合わせることにより、多くの参加者呼び込み、活動の認知を広げた。

(3) 現在の課題

以上のように、初年度は、実空間と仮想空間の双方に情報の発信拠点をづくり、活動の認知を広げながら、可能な限りの史料収集を行なうことができた。

一方で、入手した史料の取り扱い(編集や保管の方法)や、関心を持つ人々の裾野が一定以上には広がりにくいこと、特に若年層への訴求が難しいことなどの課題に直面している。

また、史料の収集についても、さらに深く、まちの人々の手元にある「まちの記憶」を掘り起こすことや、アクセス可能な史料の網羅性を高めることも、今後取り組んでいきたい課題である。

4 現況把握のためのフレームワーク

(1) フレームワークの必要性

上記の課題の解決にあたっては、周辺の活動との連携や、今後の進め方についての俯瞰的な検討が有効だと考えるが、その際、プロジェクトの「現在地」を明確にすることが重要である。言い換えるならば、「まちの記憶の共有」として目指したい具体的なゴールや理想的な全体像を示した上で、このプロジェクトがどのように位置付けられ、現時点でどのくらいのことが達成できているのか、あるいはどのような課題が残されているのか、といったことを、他者と共有できる形で開示する必要がある。ここではそのためのツールとして、活動を説明するためのフレームワークを考案する。

(2) 取り組みを説明するキーファクターの抽出

まず、池上まちよみプロジェクトの実践を通じて、この取り組みを説明する上でのキーファクターであると考えられる項目を抽出する。ここでは、a) まちの記憶の在処、b) 記憶の編集(アウトプットの類型)、c) 記憶の収集や共有のための情報発信、d) まちの記憶の共有対象、e) 活動の維持継続に関わる要件、f) 主催者の属性や特徴の6つの項目に着目することとした。以下に、各項目の詳細を記す。

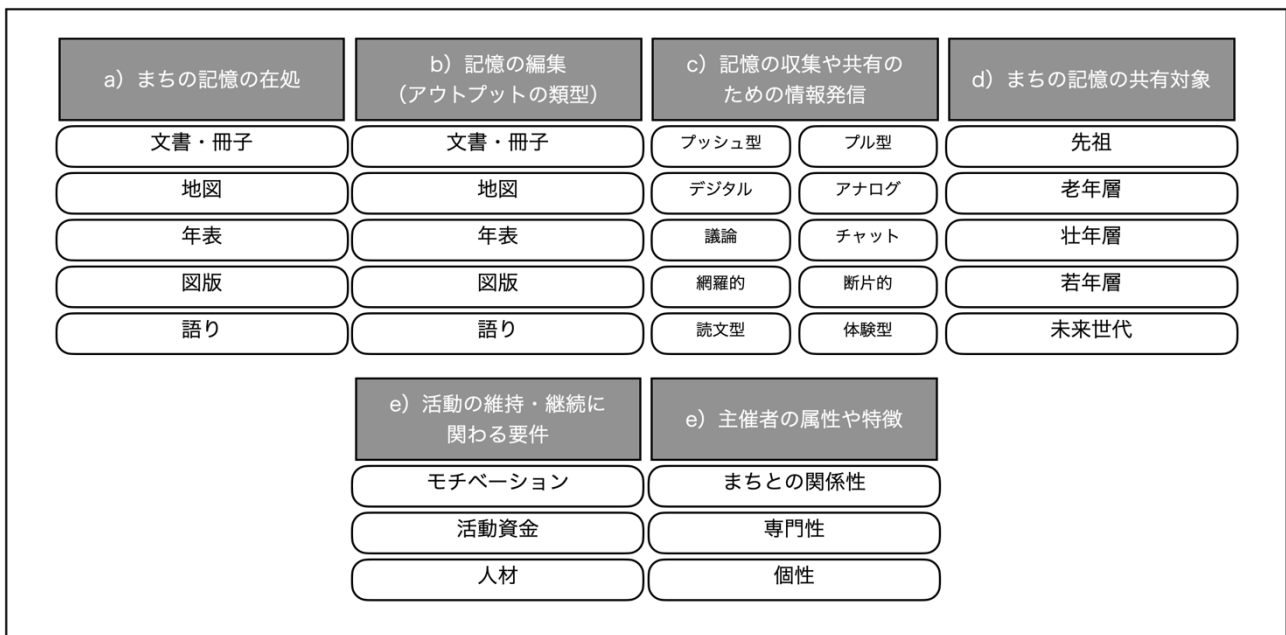


図-6 まちの記憶の共有に向けた活動を説明するためのフレームワーク（プロトタイプ、筆者作成）

a) まちの記憶の在処

まちの記憶は、言うまでもなくまちのさまざまなところに存在するが、主に、大きく分けて、文書・冊子、地図、年表、図版（スケッチを含む）、語り（まちの人の脳内にある記憶）の5つの形をとって存在しており、これらのものは、博物館や図書館などの大型施設に格納されているほか、まちの記憶を取り扱う各種組織や団体、あるいは住民個人個人が所蔵している。また、それぞれ、その形式としてデジタル/アナログ、格納先として仮想空間/現実空間など、細分化することもできる。

b) 記憶の編集（アウトプットの類型）

まちの記憶はつねに何らかの編集を経て継承される。そのアウトプットの類型は、主に、まちの記憶の在処と同様、文書・冊子、地図、年表、図版（スケッチを含む）、語り（まちの人の脳内にある記憶）の5つの形が考えられる。

c) 記憶の収集や共有のための情報発信

まちの記憶の収集や共有を実践する際には、情報発信や他者とのコミュニケーションが不可欠である。また、まちの記憶の共有を目指す、幅広い世代へのアプローチにおいては、情報の発信対象やコミュニケーションの相手に応じて、そのスタイルを適切に使い分けることが肝要である。発信やコミュニケーションのスタイルは、プッシュ型/プル型、デジタル/アナログ、ディスカッション型/チャット型、網羅的/断片的、読文型/体験型などの概念で類型化できる。

d) まちの記憶の共有対象

まちの記憶の共有が対象とするのは、理想的には、そのまちに関わるすべての人々である。その多様性に丁寧に対応することが求められるが、特に留意すべきは、世代の幅広さ（この世を去った人々から、まだ見ぬ未来の人々までを含む）である。例えばb)の編集においては、未来への継承に適した形を、c)の情報発信においては、世代ごとに適した形を、考慮する必要がある。

e) 活動の維持・継続に関わる要件

まちの記憶の共有においては、基本的に、継続性が活動そのものの意義に直結する。現実問題として地域活動を維持・継続するためには、モチベーション、活動資金、人材の3つが必要である。そのどれが欠けても、活動の維持には困難が生じる。また、これらに加えて拠点（場所）があると良い。

f) 主催者の属性や特徴

地域活動の多くがそうであるように、まちの記憶の共有においても、「誰が」やるのかということが、活動の方向性や参加者動向に大きく影響する。この点についてはどうにもならない部分もあるが、まちの記憶の共有には、より多くの人々に関わってもらうことを目指すことが好ましいことから、主催者の属性が偏りすぎないように配慮することや、周辺の活動との連携によって、活動に広がりや安定性をもたせることが重要である。

(3) まちの記憶の共有を説明するフレームワーク

図-6は、上述の6つのキーファクターを、一枚のチャートにまとめたものである。本稿では、この図を、まちの記憶の共有に関わる活動を説明するためのフレームワーク（プロトタイプ）と位置づける。

このフレームワークを用いて、現在の池上まちよみプロジェクトの活動状況を示したものが図-7である。これにより、立ち上げから2年目のプロジェクトの現況が分析的に可視化され、他者への説明や、今後の方向性の検討の一助となることが期待できる。



図-7 池上まちよみプロジェクトの活動状況

5 おわりに

本稿では、筆者自身が立ち上げ、運営している「池上まちよみプロジェクト」の実践経験に基づき、まちの記憶を集め、まちの人々と共有し、次世代へと継承する地域活動について、その成果をまちづくりに資する共有知へと高めていくためには何が必要か、という観点から、周辺の活動との連携や、俯瞰的な視座に基づく活動運営の必要性を指摘し、その実現のための一助となる、活動の現況把握のためのフレームワークを提示した。

今後は、全国津々浦々さまざまな形で展開している同様の活動を対象に、本稿で示したフレームワークを用いた現況調査を行い、フレームワークの改良を図るとともに、その活動の運営者らと議論を交わし、互いの活動のブラッシュアップにつなげていく。本稿を一つの足がかりとして、目の前の課題を一つ一つ克服しながら長く活動を続け、それによって、地元のまちづくり、まちの魅力の継承に貢献していくことを目指したい。

謝辞：本稿の執筆にあたり、池上まちよみプロジェクトの立ち上げから、そのあり方についてともに議論を重ねてきた、安部啓祐氏、大宮康子氏、図の作成にもご協力いただいた新井奏音氏に、心より謝意を表する。

参考文献

- 1) 江守央, 伊澤岬, 横山哲: 市民参加型まちづくりの変遷に関する基礎的研究, 第39回土木計画学研究発表会・講演集, No.184, 2009
- 2) 小野塚 亮, 浅見 知秀, 東 宏一, 三谷 繭子: デジタルプラットフォームはまちづくりへの参加の裾野を広げることができるのか? - 栃木県小山市におけるまちづくりプロジェクトを事例に -, 日本都市計画学会 都市計画報告集, No.22, 2023
- 3) まちづくりプラットフォーム研究会: まちづくりプラットフォーム-ヒト・カネ・バシヨのデザイン -, 萌文社, 2022
- 4) 文部科学省: 教育基本法, https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html 【最終閲覧日: 2023/08/27】
- 5) 文部科学省: 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説社会編, p.140, 2017
- 6) 国土交通省: 協働による魅力的な景観まちづくりのために [行政が取り組む景観まちづくり教育の手引き], p.3-4, 2008
- 7) 西山孝樹, 藤田龍之: 「まち」および「むら」を表す漢字の語義について, 第41回土木学会関東支部技術研究発表会, IV-52, 2014
- 8) 池上町史編纂会: 池上町史, 大林閣, 1932
- 9) コトバンク「地域史」
<https://kotobank.jp/word/%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E5%8F%B2-162066> 【最終閲覧日: 2023/08/27】
- 10) 池上まちよみプロジェクト (プラットフォーム)
<https://machi-yomi.net/> 【最終閲覧日: 2023/08/27】